

はじめに

本書は『個主体の民主制「実体」化』および『経済「合理」化』（今春発刊の予定電子版）の二書といわば一体と考えることができる。各々が日本の社会、政治、経済の各側面について取り扱っている。いずれも将来のあるべき姿を求めつつ日本の現状を反省している。何事もそうであるが、過去および現状への十分な回顧なしには先に向かっての展望は開かれない。もっともその際、回顧のためにはある一定の理念が不可欠である。これなしには回顧が回顧にならず反省が反省にはならない。その点では先を見定めるための理念こそが不可欠な要因である。これこそが最も大切な事柄である。

本書は、明治以降の日本社会のあり方、変遷を「全体」主義から個の自律という方向へ反省して記述している。戦前においてもそういう方向への兆しを見ることができ。このことは人として当然生じうる問題であろう。しかし、そうとはいえ国全体として見れば、戦前はもとより現在においても個の主体性が社会的現象における中心になっているとはいえない。それが実態である。

以上の如き諸要因を心に留めつつ、本書は過去から現在を経て未来へと続くあるべき姿を探求したものである。

「個」欠落改造

目 次

はじめに	i
第1章 明治から大戦中まで（過去）	1
第1節 経過の概要	1
第2節 主体性の兆し	21
第2章 大戦後以降（現在）	31
第1節 経過の概要	31
第2節 主体性欠損症候群	68
補 遺 個別界での人材育成	93
第1節 スポーツ界での人材育成	93
第2節 経済界での人材育成	119
第3章 志向すべき道（未来）	143
第1節 道の有する諸特質	143
第2節 道をいく心構え	176
あとがき	224